

受験番号	
氏名	

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

うちの犬は長く心臓を患^{わづ}っており、しばらく前からほぼ寝たきりになっていたが、死のちようど一〇日前に血の混じった水を吐く肺水腫の発作を起こした。そのときはなんとか持ちこたえたが、そこから呼吸困難が続き、間欠的にだんだんと悪化していった。電話をするとかかりつけの獣医がすぐに往診にかけつけ、酸素ボンベを持ち込んでくださった（人の場合、ボンベは医師しか操作できないそうだ。家族は触れられない）。それを口に当てながら、そばで容態を見守った。呼吸困難であえぎ苦しみ続けるのを見ていることはとてもつらかったが、それしかできることはない。苦しいときに一緒にいないとかわいそうだと思い、息を吸うのも苦しい犬と共に寝ずに過ごし、一〇日目の明け方、最期の瞬間を看取った。ジャムは一八歳を超えていたので、犬としては長寿に恵まれたほうだろう。しかし、この経験は「高齢であればおだやかに息を引き取れる」というイメージが幻想であることを、思い知らされる経験であった。

実は、死の直前に、獣医に安楽死の可能性について尋ねたことがある。私は、以前から人の安楽死について反対の立場をとっている。生きる権利が十分に保障されているとはいいいがたい今の社会で、死の権利を優先する理由はなく、むしろ弱い立場に置かれている人の「生きたい」と願う声を消してしまいかねないと考えているからだ。にもかかわらずそう尋ねたのは、呼吸困難で苦しむ姿はどう見ても耐えがたいものであったし、長くてもあと数日の命なのは明らかだったからである。しかし、そのとき獣医から、「ジャムちゃんはお父さんと一緒に居たいと思って、頑張って生きていると思います。見守ってあげてください」と言われた。その言葉によって、苦しくとも息絶えるまで付き添おうと思いなおした。看取るということは生を徹底的に肯定することなのだ^と、改めて教わった。

獣医には、酸素ボンベの手配、動物病院の診療時間が終わったあとの夜間の往診など、できる限りの苦痛緩和の手はずを整えていただいただけでなく、今現在の状況とこれからの見通しを丁寧に説明していただき、実際にほぼ説明のとおりの経過をたどった。厳しい状況を逐一告げられ、苦しむ時間もどんどん長くなっていったのだが、それでもしっかりと状態を言葉にしてもらうことで、ある種の安心も得ることができた。

たとえ寿命をまっとうしたといえる高齢であっても、本人は苦しむかもしれない。家族も死に向き合うことは苦しい。誰にとっても愛する者の死は受け入れがたく、ともすれば不条理な体験に感じられる。「なぜ死ななければならないのか」と自問しても、答えは出ない。一方で、私自身この経験から、支援職による苦痛緩和と状況の言語化というサポートが、付き添う家族にとって大きな力となることも実感できた。

不条理に向き合うケアは、あらゆる逆境に共通して求められるものかもしれない。死だけでなく、貧困や暴力、孤立、あるいは障害といった場面で際立つ。「なぜ私がこの病になったのか?」「なぜ私は障害を負っているのか?」「なぜ差別されているのか?」「なぜ虐待を受けなければならないのか?」といった、答えのない問いが立つ状況は、ケアの場面では避けることができないだろう（もちろん虐待やいじめ、貧困の場合、本人の責任ではないので環境を変化させて暴力を停止したり貧困から脱却させたりしないといけないが、この問題については別の機会に論じたい）。

医療的ケアの文脈における看取り、そして主に福祉的な文脈で課題となる逆境は、一見すると遠い事象であるように見える。しかし、看取りと逆境にいる人へのケアを一続きのものとして視野に入れてみると、結局は「生き延びる」ことにまつわる苦痛という、連続した問いが浮かび上がってくる。まさにこの点で、生の肯定としてのケアが果たせる役割があるように思われる。

本人の視点から見たときには、変えることができない困難の経験は、二つの段階を経ていくように思われる。ひとつは、**不条理に押しつぶされることなく、直面することができるようになる段階**、もうひとつは、**語りえなかったことを語る**ことができるようになり、**生を自ら形作ることができる段階**である。もちろん極めて困難なことであり、うまくいくこともあれば、いけないこともある。

（村上靖彦『ケアとは何か―看護・福祉で大事なこと』による。）

問一 下線部「看取る」ということは生を徹底的に肯定することなのだ」とあるが、筆者の場合、これは具体的に何をすることであったか。六〇字以内で説明せよ。（句読点も一字に数える）

問二 右の文章に対するあなたの意見・感想を、具体例をまじえて述べよ。（六〇〇字以上八〇〇字以内）（句読点も一字に数える）